

「良い実践研究論文を書いていただくために」

今回から3回、研究推進委員会からの依頼でコラムを書くことになりました。この3月まで学会誌編集委員長を務めておりましたので、その常任編集委員会でよく話題に上ったことを中心に、個人的に考えていることを、自戒も込めて、書きたいと思います。

編集委員長の任期中に最も取りざたされた問題は、実践研究論文に不十分なものが多いいということでした。具体的には、問題意識や実践のアイディアの出自が不明で、キャリア教育や進路指導の研究のどこに位置づくかが不明瞭、また概念の定義や仮説が曖昧であり、結果の検証方法にも不十分な点が多くある、ということです。すなわち、「こんな実践をやってみたら結果はこうでした。」という報告があるだけで、「それがいったいどれだけの価値をもつのか」が伝わらないのです。

査読者が論文を読むときにはまず、そこに報告された研究の意義や必然性を批判的に読みます。これはなにも意地悪だからではなく、研究論文というものが、過去の蓄積のうえに的確に位置づけられてこそ価値があり、また次にもつながるものだからです。実践研究論文の場合には、その実践が目指す目標はなぜ重要か、その方法による実践が目標に照らして効果的だと予想できたのはなぜか、過去の実践と比べてどのような新しさがあるか、ということです。

次に実践の効果が適切な方法で検証できているか、が重要な点です。実践は得てして通常の学校・学級で行われるために対象人数が十分ではなかったり、効果測定の指標が感想文などの主観的なもの、あるいはうまくいったケースのみを紹介していたり、実践前の状態との比較がなかったり、などが問題となりました。

考察においては、これは調査研究などでも同じですが、「なぜそのような結果が得られたか」と、「この結果は何を意味しているのか」について、先行研究の知見や関連する理論とリンクさせながら書くことが重要です。たとえば理由を考察する場合にも、本人の主観だけで推測が書かれるのではなく、その推測が妥当であることを裏付ける知見や理論があることで、説得力が増すだけでなく、次の研究課題にもつながります。また予想した差が見られなかった場合も（実

践や測定が失敗していない限り、) ひとつの成果ですので、できるだけの考察を展開することが大切です。考察の章において、得られた結果と関係なく持論を展開する方もいますが、「結果から言えることだけを書く」という禁欲的な姿勢が大切です。今後の課題を書く際にも、たとえば中学生を対象にしていながら、「今後は高校生も対象にする必要がある」といった、得られた結果と無関係な課題は書くべきではありません。

要するに、論文において重要なのは、研究成果の価値はもちろんですが、それを読者に伝えるうえで「隙のない説得」をするスタンスなのだと思います。先行研究との関連が書かれていないとの指摘に対して、先行する実践がないからこの実践を行ったのだ、との反論もありましたが、直接関わる先行研究はなくとも、関連する理論や概念がまったくない、これまでの研究論文とまったく関わりのないところで発想された実践はないはずです。その目標の重要性やそれに照らした実践の合理性をなんとか「説得」してほしいのです。

ここまで書いてきたことには、ハードルが高いと感じる方もおられると思います。ですが、大学等に勤める研究者と共同で行うなどして、そのハードルを越えてほしいと思います。文献を読むごとに、自分の結果に新たな解釈や視点が増え、論文に「説得力」という“厚み”が増してくることは、無上の喜びがあります。是非、一人でも多くの学会員の方が、そのような喜びを味わっていただければと思います。

(滋賀大学 若松養亮)